

謀略家・由比正雪

その栄光と挫折のプロセス

■新歴史シリーズの刊
行について

「現代人のための生き
た歴史」が、このシリ
ーズのねらいです。絶
縁された過去の物語
ではなく、あくまで現
代に立脚した新しい歴
史読物、歴史ルポルタ
ージュの分野を創りあ
げていく念願ですが、
あなたの今日と明日の
ために役立つことがで
きれば幸いです。ご意
見をおよせください。

『平和新書』編集部

『謀略家・由比正雪』

平和新書

昭和 38 年 3 月 31 日 発行

定価 260 円

著 者 関 川 周

発行者 兵 頭 武 郎

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 高 木 紙 工

発行所 アサヒ芸能出版株式会社

東京都港区芝新橋 4 の 34 (TEL 581・6261)

乱丁・落丁はおとりかえします。

(検印廃止)

■新歴史シリーズ

謀略家・由比正雪

関川 周



平和新書

■ 目次

異端の種子

江戸入り

黒い胚子

張孔堂正雪

剣と謀と人

宝蔵院の槍

血の色の酒

江戸陰謀軍

忠弥召捕り

天下人と下民

あとがき

216 200 177 153 127 110 93 67 32 16 5

異端の種子

(一)

いつの時代でも規格はずれの人間——異端児というものがいる。その異端児のなかには往々にして優れた才能が見られるものだ。また、異端児なる者は、幼いころから一種の氣概きがいをもち、自説を胸むねに抱いだいてもいる。

それだけに異端児の人生は風あたりが強い。敵もできる。……障害の壁は、つねに行手に立塞ふさがるとしなければなるまい。

しかし、それらの障害を乗り越え、敵を倒してすすむとき、異端児は一方の指導者になり得るし、世に新風をもたらす。が、異端児はやはり異端の心の持主であつて、だからこそ新風を巻き起こすこともできるが、反面、それは反抗的、破壊的でもある。これは現状打破、つまり革命に通じる性向せいこうかもしれない。いや、異端児は風雲に乗れば革命を企図し、天下を睥睨へいげいするだろう。

それ故に歴史を書きかえる者は、異端児のなかから最も多く現れるのだ。

本篇の主人公である由比正雪もまたこの異端児の一人である。

彼は、徳川幕府転覆という破天荒な目論見をたて、その一党とともに惹き起こした「慶安の変」（二六五一年）のヒーローだ。幕府にとって、彼は極悪の謀叛人であるが故に、断罪の公文書以外すべて抹殺されたが、巷間における記録は『慶安太平記』をはじめ、『由井根元記』またの名を『寸虫大望記』、それに『翁草』、ついで『望遠記』（作者名、由緒など後章で述べる）等があつて、それによつて見ると、正雪とその一統がなした叛乱の規模と世の中の動きがわかる。まさに正雪が尋常ならざる人物だということが、それらの記録のなかに躍動してもいる。現代人の眼から見るなら、彼は一謀叛人としてかたづけられるべきものではなく、革命家の観さえある。

よくぞ、あの時代に彼のような反逆児が生れたものだと思う。

もし、彼が平凡な種子なら、『由井根元記』の示す彼の出生が駿州由井（湯居とも書く）の紺屋の子とあるように、藍麤の匂いのする土間で育ち、前垂れかけの商人で生涯を終ったかもしれない。

だが、後年、由比民部之助正雪となる種子は違つていた。

ところで、正雪の出生の地であるが、『望遠記』によると、じつさいは由井の生れではなく、それより西の駿府（静岡市）の宮ヶ崎で、紺屋を業とする岡村弥右衛門の二男として生をうけたのだという。この宮ヶ崎は、現在の静岡市宮ヶ崎町で賤機山の登り口にあたる。

彼の幼名は久米。

正雪の幼名は、彼が大謀反人になったせい、現在つたえられているものの中には芝居がかった大袈裟な名や悪どい名などがいろいろあり、『慶安太平記』では富士太郎、講談では富士松となつてゐる。が、本篇では久米（寛明日記ではそうなつてゐる）としておく。

この久米は成長するにつれて、家業を嫌い、読書好きな少年となつた。それに早熟で男女の秘密などとつくに知つていたらしい。また大人の顔いろをよく読み、弁舌が巧みだったという。それでいて浮薄な子供ではなく、性根があつて、終日、何か考えこんでいたりした。

父の弥右衛門は、首をひねり、

「こやつ、生れどこを違えたな」と、呟いたものだ。

少年久米の十二歳の年のときだった。

ある日、弥右衛門は久米をつれて、同じ駿府の町の臨濟寺を訪れ、かねて知遇を得ている老住持に、

「和尚さま、久米のことですが、どうにも紺屋の餓鬼ではないようでございます。一つ、あやつを弟子にしていただけませんかやろか」

と、頼みこんだ（『老子語録』）。

老住持は、弥右衛門のうしろに坐つてゐる少年久米をジロリと見ていった。

「よからう。おいて行きなされ」

老住持のその一言で、即日、久米は寺小僧になったのである。もし、久米の寺小僧生活が、そのまますつと続いたら、末は学徳すぐれた僧侶になっていただろう。が、異端の種子は、この寺で過すうちに陰謀家になる栄養分を吸って成長したようである。

それというのも臨濟寺は、いまの静岡市大岩町にある禅寺で、天文四年（一五三五年）、今川義元（一五一九―一五六〇）の兄氏輝の菩提所として大原雪斎和尚が開基した寺。この大原雪斎は、今川義元の叔父であり、かつその軍師として数々の戦功をたてた武将である。それが禅による悟りか、いつか軍陣をはなれ、得度すると、この寺を建立して籠ったのだ。それにしても永禄三年（二五六〇年）、桶狭間の戦いに今川義元が討たれたと聞くや、ただちに人を派して信長の軍営より義元的首級をもらいうけ、臨濟寺に葬ったという傑僧である。それとまた今川家の数々の文書や記録、軍書の類も雪斎和尚は引取り、臨濟寺に所蔵しておいたのだ。

大原雪斎が今川義元にとっていかに重要な存在であったかという一例のために『甲陽軍鑑』の一節を紹介しておこう。山本勘助が武田信玄に向ってつぎのような意味のことをいったというのである。

『今川では雪斎という老僧が介添となって公事万端の指図をしておりますが、寔に危いことございます。雪斎は老齢、明日をもしれませぬ。そうなつては家老衆がどのようにとり行つても雪斎ほどにはゆきかねましよう』

さて、小僧の久米は、如来像や経文より、その軍書や武家の記録類に心をひかれた。いや、憑

かれたというべきか。また、太平記やその他の戦記の写本にも接したのである。

久米が一小僧の身で、それらの軍書や写本に心ゆくばかり親しみ得たのは、彼が入門して間もなく、老住持が病いの床に臥り、その看取りを命ぜられたからだ。

枕頭に香をくゆらした褥で、老住持が昼も夜もなく臥っている次の間で、青道心の久米が、熱心に眼を凝らしているのは經典ではなく、軍書の類いである。

少年久米は、その軍書のかなたに展開する戦争という雄大なドラマに酔っていたのに違いない。……陣鼓のとどろきがし、矢鳴りが聴こえた。馬蹄がひびき、陣太刀がひらめくと、長槍の列が迫ってくる。

関の聲がし、硝煙が破裂した。

旗指し物が煙霧の中からあらわれては消えた。

久米の脳裡には、そうした凄絶なシーンが活きた絵巻物としてひろがっている。それはまた戦争に伴う人間の栄枯盛衰を觀せてもくれる。

……一介の足輕から身を起こし、位人臣をきわめて殿下と尊称された男。槍一筋で一城の主となった豪傑。軍略智謀ともにすぐれていながら、側近の微臣に毒殺される大名。——その落城とともに消える美姫や上臈。それに、きらびやかな殿上人の儂い運命。変幻自在な盗賊たち。そして、苦しみ、餓え、虫けらのように死んでゆく下民の群れ。

少年久米は、幽暗な居室の……経机の前に端坐しながら、脳裡に明滅するそれらの人間像を視

つめては、

「人は知恵がないとえらくなれん」

——腸はらわたから絞りだすような呟きである。

(二)

さて、少年久米が臨濟寺の奥で読書三昧に明け暮れる三年余の日時が流れつつあるとき、その時代の動きはどうであつたか。これはまさに天下泰平そのものだった。

將軍は三代の家光(二六〇四―五二)。

徳川の基礎をつくる柳営の工作まったく成り、首府の江戸は殷賑いんしんをきわめ、諸大名の配置換えと参勤制度が確立し、法令は制定され、通貨もどうやら安定して、幕府はいまや全盛を誇るべき時代に入っていた。

しかし、幕閣は幾つかの難問題をかかえて、その統裁や処理になやんでいたのも事実である。
——外国通商と鎖国。豊家残党の取締り。キリシタン宗徒と一揆。諸国より輩出した浪人の処置などである。

特にこの浪人問題は、浪人群のなかに豊臣方の残党も混るし、やがて島原の乱が起これば、これに浪人者が馳はせ参じて強力な敵と化す……というように、幕府治政上の癌がんとなっていたのだ。

この浪人者を「失業武士」と、徳富蘇峰翁は明確に定義しているが、幕府が恐れていたのは、彼らが単なる家禄^{かろうく}を失った——失業武士ではなく、関ヶ原における敵方の臣であり、そうでなければ、幕府によって改易^{かいえき}または減封になった大名の家来であるという点で、彼らの胸中に反徳川の氣風がひそむことを知っていたからだ。

しかも、その浪人群は増加の一途をたどり、食禄を求めて各都市へ流入していたのだ。殊に江戸における浪人者の増加は、もし徒党^{とどう}を組み、集団をなして事を起こしたなら……という危惧は、治安担当者の町奉行はむろん、老中にさえ常に胸の中にあった。

なにしろ、当時の浪人者の数は、無慮^{むりょ}二十万人……と、直木三十五はその著書のなかでいっているし、徳富蘇峰も『近世日本国民史』のなかで、大坂ノ役以後の改易された諸大名の数を次のごとく挙げている。

『元和二年（一六二六年）七月、家康第六子松平忠輝の四十五万石。元和五年六月、福島正則の四十九万八千二百十三石。元和六年八月には田中忠政の三十二万五千石。元和八年八月には、最上義俊の五十七万石。同年同月には本多上野介^{うのすけ}十五万五千石。元和九年三月、松平忠直の六十七万石。寛永四年（一六二七年）正月、蒲生忠郷の六十万石。寛永九年六月、加藤忠広の五十二万石。同年十月、駿河大納言忠長の五十五万石。寛永十年九月、堀尾忠晴の二十四万石。寛永十一年八月、蒲生忠知の二十万石。寛永十三年七月、鳥井忠恒の二十四万石。寛永十四年には京極忠高の二十四万四千二百石余。寛永十七年七月には、生駒高俊の十七万三千石。寛永十九年三月には、

堀直定の十万石。寛永二十年五月には、加藤明成の四十万石等』

これらの廃絶した藩地より、大半の家臣が浪人者として各地に流れでたが、彼らは浪々の身になつたとはいへ、世のエリート族である。従つて、侍というエリート族の矜持（きんぢ）と生活様式を守らねばならなかつた。いや、それを守らねば生きられない種族だつたかもしれない。

いかに落ちぶれても、士農工商という通り、その最上位にある者だ。……武技とともに學問も身につけ、教養もある。また、主持（しゆも）ちであつた頃に、闇夜に斬りつけられても鯉口三寸切つていなければ、家は断絶（だんぜつ）という敵（きみ）しい掟（おきて）のなかに生きていたのだから、浪々の身となつたいまでも、武士としての名誉と体面は同じように保たなくてはならない。

それは哀（かな）しいことに金錢を得て暮しながら金子（きんす）を卑（いや）しみ、格式を重んじ、系図という名で象徵される祖先（ごいせん）を後生大事（ごしやうだいじ）に背負い、その上で、もはや亡霊と化した旧主家の名を恥（はづ）ずかしめないという処世をしなければならぬのだ。

それでいて彼らのほとんどが、第二の主取り（しゆど）を望み、過去の……肩衣（かたぎろ）をつけて颯爽と登城した日の再現をひたすらに夢見ている。しかし、そうした同じ目的をもつ浪人が二十万人というのは、現今の宝クジに当る率のようなものであろう。

だからこの趨勢（すうせい）を見て、身を武士以外の職業にかえた者も少くはない。

——百姓、商人、医師、寺小屋の師匠、易者、武芸の指南者、武具の細工人と、それぞれの違いはあり、また、それ以下の賤業に身をやつした者もあるが、さりとてチャンスがあれば主取り

をした、気持ちをはとんだの者がもっていた。

だが、世は泰平で、大名旗本いずれも戦闘要員としての武士の召抱えは必要でなく、文物が進み、制度がととのい、学問や宗教がひろまり、遊芸の道が世に浸透すると、武士の魂とされた刀剣まで装飾化してきた。

こうした風潮とともに町人階級が抬頭し、卑しむべき金銭が万能の具として通用するばかりか、政治や宗門まで、この金銭——黄白に左右される観さえあった。

(二)

ここで筆者が奇異に思うのは、利発な少年久米が臨濟寺における読書三昧で、知的開眼をとげて世に出るに及び、なんとしたことか、兵書軍学を学び、仕官の道もないのに侍になろうとした事実だ。いや、侍すなわち浪人者となつて、江戸の……浪人者のあふれる巷で、時代と迂遠になりつつある兵学で身を立て、その大家たらんとしたことだ。

もちろん、徳川幕府転覆という覇業を胸に秘めての行動だと片附けてしまえばそれまでだが、果して、初志一念、陰謀と謀叛の望みだけで、うら若い日から生きた男なのだろうか。

……謎である。

筆者には、幾つかの疑問を感じる。

由比正雪なる人物には、謎と妖気が、いつもその身邊に漂うのだ。

そこで筆者が、それらの謎を解くより、彼正雪のドラマチックな生涯を考証し、記録によって彼の人間像にスポットをあてて、読者の判断にまかせることにしたい。

しかし、正雪に関する資料や記録は、世にあまり残されていない。いや、その残された資料だとて信用がおけないし、正雪自身、己れの過去や出生を、かなり体裁よく潤色して残したふしがあるのだ。従って、彼が「慶安の変」の首魁として、非業な死をとげるまでの経緯は諸説紛々としているが、それにしても実録物と称する書が、世に幾種類か残されてはいるのだ。

その一つが有名な『慶安太平記』である。

この書は、寛永年間に江戸牛込に居住していた庄内藩士の山内五太夫なる侍が、由比正雪と親交があった由で、その見聞きした事実を後年に板尾某という人物に語った、それを一本にしたのが『慶安太平記』だという説である。

次が『望遠記』で、またの名を『望遠雜録』ともいう。

これは片岡氏某という浪士が、友人の談話を聞いて著述したという意味の序文が附してあるものの、その巻末附録に正雪一党からの脱盟者・土方氏右衛門の著ともしてあるのだから、奇妙な書だ。

次のもう一つが、徳富蘇峰氏も参考に行っている『由井根元記』、または『寸虫大望記』とか『由井記大全』ともいう本である。

この本は、正雪が駿府で非業の死をとげた当時、駿府城の加番、すなわち本役の補助をするために出張勤務をしている秋田安房守の家来に山下弥惣右衛門という士があり、その弥惣右衛門の実見談——覚え書がきから、閼老として正雪の陰謀事件を捌さばいた松平伊豆守の家臣・鈴木理右衛門が書き取っておいて一冊にしたというものである。

——加えて、井原頼明氏の『禁苑史話』もある。

その他、雑記録となれば幾らでもあるが、以上の書を骨子こっしとして、本稿の筆をすすめることにしたい。